

嘉納治五郎杯国際柔道大会のゲーム分析

藤 岡 正 春*

Masaharu FUJIOKA
Analysis of judo games in the Kano Cap
International Tournament, 1978

1 研究の目的

柔道の国際化に伴い、日本柔道は重量級のみならず軽量級の力も諸外国と接近し、全階級制覇は至難とされるようになった。第3回世界選手権に続き東京オリンピックにおいてもオランダのヘーシング選手(196cm, 120kg)に敗れ、寝技の重要性と体力不足が大きく指摘された。以後、世界の柔道はパワーの柔道へ進むとともに、選手の大形化(オランダ・アドラー, 218cm, ソ連・チュールン, 210cm, 共に140kg)と国際審判規定の改正により、更にパワーのあるダイナミックな柔道が要求されるようになった。このような世界の柔道の趨勢の中で日本の柔道界は、体力養成と同時に外国選手向きの技として担ぐ技の修得が叫ばれ、力を入れて来た。

東京オリンピック前年(1963年秋)ヘーシング選手が2ヶ月間の天理大学での練習時に、1無名選手の小内刈に良く転んでいた。又オリンピック後の尼崎国際大会決勝戦で日本の加藤選手に同じく小内刈で技有を取られるのを見て以来、大型選手に対して最も有効な技は小内刈等の足技という確信を持つようになった。

嘉納杯は、東京オリンピック以来日本で初めての大きな国際大会であり、この大会を分析することにより、今後の日本の柔道選手は、どのような技を修得しなければならぬか、その手掛りを見付けたい。

2 研究方法

現代までに報告されている柔道ゲームの分析に関する研究を項目別にまとめると、ゲーム中の防禦動作の分析、個々の技の内容、連絡変化の比較と対応、勝負と体重、1本勝の内容(技と本数)、反則の内容、試合時間とロスタイム、試合中の動きに関するもの、技術分析等

である。国際大会での報告は、柔道技術別分類による決まり技という観点より、決まり技を国別に分類、各種目別試合に於ける試合内容の分析、各国別に試合内容の分析、身長、体重、段位、年齢に関するもの等に代表される。

1) 調査方法

日時：昭和53年11月23日～26日

場所：東京 日本武道館

記録場所 11月23日, 25日 1階N-F列一38番

11月24日, 26日, 1階N-F列一20番

この位置は正面カメラ席横で最も見やすく、自然な姿勢で記録出来る場所である。

対象：嘉納治五郎杯国際柔道大会(参加26ヶ国)

柔道の一流選手になるには、素質に加え長い年月をかけての地道な努力があり初めて到達出来る。表1は参加選手の柔道歴をまとめたものである。オリンピック、世界選手権、各地域の選手権、各国際大会、各国内の優勝者や上位入賞者が各段階にエントリーしており、現代の世界の柔道を知る上に適した大会と考えた。分析対象の試合(数)は、第1日・95kg以上20試合(21名)、95kg以下23試合(24名)、第2日・86kg以下23試合(24名)・不戦1、78kg以下25試合(26名)、第3日・71kg以下25試合(26名)、65kg以下25試合(26名)・不戦1、第4日・60kg以下22試合(26名)、無差別37試合(41名)・不戦2であった。

試合は1試合場、各階級1試合ずつ国際柔道審判規定に基づき実施された。試合時間は5分、準決勝以上7分(60kg以下、無差別の準決勝以上6試合の記録なし)。以上、196試合(不戦4を除く)を1階北側正面席より、5分間1秒ぎみの記録用紙(勝者、敗者ともに記録出来るよう2段に分けたもの)を用いて、立技、寝技、技の効果等につき施技された時間(電光掲示板を用いた)に記入した。技の効果の有無は審判員の判定によったが、

効果以下の判定は著者自身が行った。又1本勝の技名は正式発表のもの、それ以外は自から判別した。なお、記入方法は、柔道試合で使用される標識を用い、不足の所は新たに作ったものを用い記入した(例 効果以下の技、●, △印等)。

2) 分析項目

- (1) 試合の決まった時間及び地域別(ヨーロッパ, アジア, パンアメリカ, オセアニア)の敗れた時間
- (2) 試合中の寝技の所要時間から見た勝者, 敗者の比較
- (3) 勝者又は敗者が技を掛けて寝技で攻めた時の技と本数及び勝者又は敗者が技を掛けて寝技で攻められた時の技と本数
- (4) 試合中施技した技の本数とその効果から見た勝者, 敗者及び日本選手と外国選手の比較
- (5) 決まり技及び日本選手対外国選手の試合で効果以上の技について

3 結果と考察

1) 試合の決まった時間及び地域別の敗れた時間

表2は、勝敗の決まった時間から各階級ごとの実力差と地域間の力を見ようとしたものである。

全試合中約60%強が5分以内に勝敗を決しているが、各階級では、65kg以下54.2%、78kg以下48.0%と低い決定率を示し、逆に71kg以下72%と最高を示している。又、78kg以下の全体32%を除き、3分以内(表3-1、平均所要時間3分15秒)に40~50%の勝敗を決している。特に、65kg以下、86kg以下、95kg以下の各階級は50%以上の決定率を示し、実力差が大きい。逆に、65kg以下、78kg以下は1分以内の決定率が低く、実力の接近をうかがわせる。

次に、勝負決定までの時間から地域別の敗戦状況を見ると、ヨーロッパ地域が3分以内の敗戦28.6%、4分以内41.6%と抜群の成績である。次にパンアメリカ地域が3分以内で50%を割り、アジア地域が最も悪い成績である。このことから、各地域間の実力差が大きい事を示している。又、ヨーロッパ地域を除く各地域の中に於ても表1・2が示すように実力差の大きい事を示している。

^{*1} 佐藤氏らの、外国選手の体格についての研究報告によると、日本の一流選手との顕著な違いは上肢長、下肢長が長くふとこが深いこと→内股等の技の効果の度合に影響→背負投、体落等の手技が有効。日本の無差別級は、120~140kgで皮下脂肪が厚く、非活動性組織が多く20~30秒の無攻撃に対する反則を取られやすい。将来の理想像としてヘルメス型の体型が望ましいといっている。

以上のことから、対象となる外国選手はヨーロッパ並

びにパンアメリカを制覇しているキューバ選手に限定されよう。

2) 試合中の寝技の所要時間から見た勝者, 敗者の比較

表3-1より、196試合の総所要時間38,287秒、1試合平均所要時間195秒、最短所要時間は95kg以下の166秒、最長所要時間は78kg以下の244秒となっている。

表3-2より、日本選手と外国選手82試合の総所要時間14,361秒、1試合平均所要時間175秒、最短所要時間は86kg以下の105秒、最長所要時間は無差別の200秒となっている。

このことは、^{*2}川村氏らによる世界選手権の報告を見ると、1試合平均所要時間は230秒前後であり、特に無差別はどの大会でも最短所要時間で1本技も高率を示していると言っている。従って、全体では、95kg以上、無差別の選手層は充実したが86kg以下、95kg以下の選手層が薄くなったと言える。又日本選手対外国選手では86kg以下、78kg以下に実力差のある事を示している。

表3-1・2の寝技について見ると。総所要時間8,719秒、1試合平均所要時間44.5秒(23%) (表3-2、総所要時間2,293秒、1試合平均所要時間36.5秒、21%)となっている。最短所要時間は86kg以下21.9秒、13%、最長所要時間は65kg以下68.5秒、32% (表3-2、最短所要時間86kg以下11秒、11%、最長所要時間65kg以下67秒35%)となっている。勝者、敗者の攻めた所要時間を見ると、勝者75%、敗者25% (表3-2、勝者71%、敗者29%)と3対1の比で勝者が長く攻めている。

抑え込みの時間を見ると、寝技中の16%を占め、その内の99%を勝者が占め、抑えた回数57回中54回(表3-2、寝技中の20.6%、勝者が98.5%、抑えた回数25回中23回)と予想外の数字が出ている。

攻めた回数を見ると、378回中、勝者が67%、敗者が28%、攻防の逆転したもの5% (表3-2、攻めた回数118回、勝者66%、敗者27%、攻防の逆転したもの7%)となり大体7対3の割合で勝者が多く攻めているが、日本選手対外国選手の対戦では、その差が小さくなっている。

階級別に見ると、86kg以下、95kg以上は寝技の所要時間、攻めた回数とも表3-1・2の最低である。即ち、立技での実力差がないためと思われるが、95kg以上の攻めた回数が少ないにもかかわらず抑え込みの回数が多いことは寝技の修得が不十分と考えられる。このことは川村氏らも同様の報告をしている。

以上のことから、寝技では、勝者は攻めた所要時間、攻めた回数、抑え込みの回数が見事に常に優勢に試合を進めている。特に、寝技では最低負けないだけの力量を備える事が重要である。又、攻防の逆転する事の難しさを示しているが、国際審判規定の影響も大きい。

表3-1 試合中の寝技の所要時間(秒)

階 級	試合数	総時間	平均	5分以上を 除く	寝 技																			
					総時間		平 均		勝者攻		敗者攻		抑え込みの時間						攻めた回数					
						%			時 間	%	時 間	%	勝 者	%	回	敗者	%	回	○	%	□	%	△	%
60kg以下	22	4289	195		1029	24	46.8	780	76	249	24	124	12	5				34	67	1	2	16	31	51
65kg以下	24	5168	215	4900/204	1643	32	68.5	1224	75	419	25	214	13	8				43	65	4	6	19	29	66
71kg以下	25	4902	196	4542/182	997	20	39.9	867	87	130	13	233	23	8				37	69			17	32	54
78kg以下	25	6099	244	5739/230	1178	19	47.1	882	75	296	25	61	5	3				28	64	8	18	8	18	44
86kg以下	22	3685	168	3545/161	481	13	21.9	355	74	126	26	85	18	4				14	54	3	12	9	35	26
95kg以下	23	3825	166	3755/163	922	24	40.1	695	75	277	25	191	21	7				29	71	2	5	10	24	41
95kg以上	20	3637	182	3402/170	563	16	28.0	494	88	69	12	233	41	9				19	79			5	21	24
無 差 別	35	6681	191		1906	29	54.5	1272	67	634	33	273	12	10	19	1	3	49	68	2	3	21	29	72
全 階 級	196	38287	195		8719	23	44.5	6554	75	2165	25	1377	15.8	54	19	0.2	3	254	67	20	5	104	28	378

備 考 %-小数第1位四捨五入(101%...四捨五入のため) ○-勝者の攻 □-勝者・敗者両方の攻めがあったもの △-敗者の攻 抑え込みの% = $\frac{\text{抑え込みの時間}}{\text{寝技総時間}}$

表3-2 日本選手対外国選手の試合に於ける寝技の所要時間(秒)

階 級	試合数	総時間	平均	寝 技																			
				総時間		平 均		勝者攻		敗者攻		抑え込みの時間						攻めた回数					
					%			時 間	%	時 間	%	勝 者	%	回	敗者	%	回	○	%	□	%	△	%
60kg以下	10	1886	188.6	300	16	30.0	266	89	34	11	69	23	3				12	71	1	6	4	24	17
65kg以下	12	2287	190.6	804	35	67.0	535	67	269	34	129	16	5				15	60	3	12	7	28	25
71kg以下	9	1745	193.9	196	11	21.8	168	86	28	14	60	31	2				7	64			4	36	11
78kg以下	10	1666	166.6	318	19	31.8	196	62	122	38							11	73	1	7	3	20	15
86kg以下	14	1457	104.7	154	11	11.0	75	49	79	51	13	8	1				3	33	1	22	4	44	9
95kg以下	9	1752	194.7	485	28	53.9	397	82	88	18	136	28	5				12	80	1	7	2	13	15
95kg以上	7	1373	196.1	187	14	26.7	187	100			110	59	4				6	100					6
無 差 別	11	2195	199.6	549	25	49.9	289	53	260	47	90	18	3	10	2	2	12	60			8	40	20
全 階 級	82	14361	175.1	2993	21	36.5	2113	71	880	29	607	20.2	23	10	0.3	2	78	66	8	7	32	27	118

備 考 寝技の総時間の% = $\frac{\text{寝技}}{\text{全体}}$ ・抑え込みの% = $\frac{\text{抑え込みの時間}}{\text{寝技総時間}}$

表4

①勝者又は敗者が技を掛けて、寝技で攻めた本数

(○…技有 ◎…有効 ⊕…効果 ⊖…効果以下の技(抑え込み1秒~9秒程度の技) △…◎以下の技)

②勝者又は敗者が技を掛けて、逆に寝技で攻められた本数

技	階級効果 60kg以下から無差別まで					小計	大計	決まり数
	○	◎	⊕	⊖	△			
背負投	2	6◎	3	9①	12①	33	○	42 5
小外刈	1	2	4	4	6①	17	○	19 1
巴投		2	1	2◎	8	13	○	16 2
小内刈		4◎	5	3	1	13	○	16 2
内股	2◎	3	1	1	5◎	12	○	15 4
大内刈	1		8◎		1	10	○	14 6
体落		1	7◎	2◎	2	12	○	13 4
支鉤込足	1①	1	4◎	1	1①	8	○	9 4
大外刈	2①			3	2	7	○	9 1
袖鉤込腰		1①		1	1	3	○	4 1
引込返		1			2①	3	○	4 1
鉤込腰			1		2①	3	○	3 1
後腰	1	1①	1			3	○	3 1
返し技 (払腰・大外)		1			2①	3	○	3 1
大外返		1			2①	2	○	3 1
出足払				1①		1	○	1 1
○計	13◎	23◎	37◎	30◎	60◎	163	○	
□計		1	7	7	27	42	□	205 36
□+○計	13	24	44	37	87	205		

その他の技 大腰、足とり…4
 払巻込、浮技、足払、手内股、両手刈…3
 払腰、小内透、小内返、大外透、カニバサミ、腋固…1
 (その他の技も計に含まれている。)
 備考 ○勝者が技を掛けて攻めた本数
 □敗者が技を掛けて攻めた本数
 ①内の数は決まり技(1本・合技)になった本数

技	階級効果 60kg以下から無差別まで					小計	大計	決まり数
	○	◎	⊕	⊖	△			
背負投			1	3	23◎	27	▽	50 2
巴投		1		3	19	23	△	24 1
体落				1	14①	15	▽	21 1
内股				1	5	6	△	8 1
払腰					8◎	8	▽	8 1
小外刈					6①	6	▽	7 1
大外刈			1		1	1	△	7
小内刈					2	2	▽	6 1
大外刈					5	5	△	6 1
小内刈		1①			4①	5	▽	6 1
払巻込					1	1	△	5
浮技					2	2	△	4 1
大内刈					3◎	3	▽	3 1
▽計		1①	2	4	84◎	91	▽	153 11
△計		1	2	6	53	62	△	
▽+△計		2	4	10	137	153		

その他の技 肩車…3
 大腰、両手刈、袖鉤込腰、すてみ…2
 外巻込、小内返…1
 (その他の技も計に含まれている。)
 備考 ▽敗者が技を掛け勝者が攻めた本数
 △勝者が技を掛け敗者が攻めた本数
 ①決まり技の本数

- 3) 勝者又は敗者が技を掛けて寝技で攻めた時の技と本数及び勝者又は敗者が技を掛けて寝技で攻められた時の技と本数

全試合中、378回あった寝技の内、はっきりした立技から寝技に移行したものが358回、残り20回は「技とは認められないが巧みに寝技に移行した」ものである。この358回中(表4-1)勝者が技を掛けて寝技で攻めたものの163回(45.5%, 1本技36本=22.1%), 敗者が技を掛けて寝技で攻めたもの42回(11.7%, 1本技0)合わせて205回(57.3%), 又、(表4-2)敗者が技を掛けて勝者に寝技で攻められたもの91回(25.4%, 1本技11本=12.1%), 勝者が技を掛けて敗者に寝技で攻められたもの62回(17.3%, 1本技0)合わせて153回(42.7%)となった。

次に、勝者又は敗者が技を掛けて攻めた場合を合わせ、技別にその本数を見ると、背負投42本(20.4%)を占め、小外刈19本、巴投、小内刈16本、内股15本、大内刈14本、体落13本、大外刈、支釣込足9本、いずれも勝者の技が多くなっている。又、勝者又は敗者が技を掛けて攻められた場合を合わせて見ると、背負投50本(32.9%)と群を抜いて多く、次に巴投24本(15.9%)で、勝者、敗者の技は5分5分となっている。続いて体落21本(敗者の技が7割)、内股、払腰、大外刈(敗者の技が8割以上)となっている。

次に、技の効果の点から見ると、表4-1の抑え込み1秒以下程度の技(△印)87本=42.4%(勝者36.8%, 敗者64.3%), 表4-2では137本=89.5%(勝者64.3%, 敗者92.3%)となっている。表4-1で1本技に直結した技の本数の多いものは大内刈6本、背負投5本、体落、支釣込足、内股4本となっている。表4-2では1~2本となっている。

以上のことから、寝技で攻める機会は、技を掛けて攻めた場合が受けた場合より大体6対4の割合で多くなり、有利となるが、ただ多く技を掛けるだけでなく力強い効果のある攻め技を掛ける事が重要となる。即ち、勝者の技でも効果のない技、あるいは無攻撃に対する反則から免れるために掛ける技(退りながらの背負投、巴投等)は逆に攻めの機会を与えることとなる。従って最低効果以上の技を掛ける事が1本技に直結させる率を高くする。

個々の技では、背負投(相手に背を向ける)、巴投(捨身技)は多く攻めているが、逆に相手から攻められ易い技であり、決断良く力強い掛け方をすることである。又、試合技として高く評価されている体落が意外と多く攻められていることは、技の掛け方(使い方)に研究の余地がある。その他の技は全て技を掛けて攻めた場合が上回っており、積極的に技を掛けること(寝技の自信があっ

て初めて思い切った技が掛けられる)が試合を有利に進めることになる。

- 4) 試合中施技した技の本数とその効果から見た勝者及び日本選手と外国選手の比較

表5より、全体の技の総施技数は2,018本である。その内効果以上の技18.3%, 1本技(1本技5.1%合技、総合勝、反則勝を含めると6.0%)122本となり、62.3%が1本勝試合となっている。

勝者・敗者の施技数は59.2%対40.8%で勝者が多く技を掛けている。技の内容を見ると、勝者の効果以上の技27.8%に対し敗者は4.4%と大きな差があり、技の切れの違いを示している。又各階級別でもほぼ全体と同様の傾向を示している。

日本選手対外国選手82試合の技の総施技数は812本である。技の内容は、効果以上の技21.7%, 1本技52本(合技を含む6.4%)で1本勝試合は63.4%となっている。日本選手と外国選手の施技を分けてみると、日本選手の施技57%に対し外国選手43%と日本選手が多く技を掛けている。技の内容を見ると、日本選手の効果以上の技30.9%に対し外国選手8%と大きな差がある。特に95kg以下では施技数で59.4%と日本選手を上回りながら効果以上の技11.1%と日本選手の30.2%(全体の施技数106本中、日本選手22.5%, 外国選手6.6%)と大きな差があり、外国選手全体から見た場合まだ技術差の大きい事を示している。

- 5) 決まり技及び日本選手対外国選手の試合で効果以上の技について

表6-1より、全試合中、判定に関係した技は230本あり、その内訳は、立技147本(63.9%), 寝技52本(22.6%), 総合勝、反則勝(3.5%), 僅差(技の不明のもの10.0%)となっている。1本勝は全体の62.3%を占め、立技57%, 寝技38.2%, その他4.9%となっている。

立技10本以上の技は、背負投27本(19.3%), 内股23本(15.3%)と抜群の数字を示し、大外刈12、大内刈11本、体落10本となり、内股、大外刈の1本技は50%となっている。

寝技は52本中50本が1本技につながっており、極め技としての確実性を示している。中でも横四方固は44.4%を占め寝技の要と言えよう。

表6-2より、82試合中、効果以上の技は172本(場外注意1を含む)あり、立技142本(82.6%), 寝技29本(16.9%), その他となっている。1本技は立技59.1%, 寝技40.9%となっている。

10本以上の技は、背負投26本(1本=カッコ内は外国選手に取られたもの)、小内刈17本(2本)、内股14本(3本)、大内刈14本(2本)、大外刈12本(1本)、小外

刈11本（3本）、体落10本（1本）、横四方固13本（1本）となっている。この内、小内刈が軽量級に集中しているのを除き、各階級平均して効果を上げている。又本数は少ないが巴投6本が軽量級に集中し、全て日本選手が効果を上げている。

川村氏らの世界選手権大会の分析報告では、「手技は背負投、体落が多く、回を重ねて背負投が中量以上に多くなり全階級に幅広い決まり技の傾向がみられる。腰技は払腰が圧倒的に多いが、全体では手技、足技、抑え技に比べ非常に少ない。足技は決まり技の種類も最高で、全決まり技中でも背負投につき多く、内股、大外刈、大内刈に集中し全階級に平均している。抑え技は崩上四方固、横四方固、上四方固が多くほとんど同率である。これらの技は多数の国にわたっている」と言っている。^{*1}又、1979年1月、フランス国際柔道大会監督報告中「軽量級・膝についての背負投は全く通用しないこと。大外刈、内股、払腰等の研究が絶対に必要である。重量級・外国選手のパワー、スタミナ、握力の強さが全く違い、軽量級と逆に背負投、体落の修得が必要である」といっている。同様に1979年3月、東ドイツ国際柔道大会監督報告にも「背負投等の担ぎ技主体では倒し得ない。低い姿勢の相手に対して内股、払腰、大外刈を得意技に持てば国際試合で優位に闘える」と言っている。^{*3}

以上のことから、決まり技に於ける立技は背負投、内股、大外刈、大内刈、体落と1970年代前半と同様の傾向を示している。寝技は崩上四方固、横四方固、上四方固から横四方固に集中して来た。これは、実力の接近に伴い豪快に180度回転させる技（腰技）が少なくなり、横から攻める割合が多くなったためと思われる。従って横四方固の修得が重要である。又外国選手の体力等を考えた場合、下方から攻める技、即ち縦四方固（最も力を使わないで抑えることが出来る）の修得が大切である。

対外国選手との技を見ると、小内刈が上位にランクされ、小外刈、巴投が見られる。小外刈は日頃打込等の難しい技であるが、練習を工夫し力を入れれば有効な技となる。小内刈、巴投は軽量級に集中し、ほとんど日本選手が効果を上げており、外国選手のあまり使わない現時点で更に研究すれば最も有望な技と考える。

4) ま と め

「現代の国際柔道は、柔道の中の規定というより、規定の中の柔道という印象」と言われ、特に無攻撃に対する罰則が厳しくなり、強大な体力が要求されるため、外国選手の体力をどうしても念頭に置かざるを得ない。これらの外国選手を倒すこれからの日本の柔道選手のタイプを考えると、外国選手の体力や姿勢等から日本の重量級選手は、従来の大技選手向きの技に加えて、背負投、

体落しの修得は勿論大切であるが、小内刈、巴投、大内刈等の足技の修得に最も力を入れるべきである。軽量級選手は、背負投、捨身技等の技のみならず、従来の大型選手向きの技と考えられていた内股、大外刈等の大技の修得が必要である。

更に、小技から大技への連絡が多かった組み立てを逆にして、大技から小技への連絡技の研究、修得が望まれる。これらは全て立技についてであるが、立技の効果を十二分に発揮するためには、寝技の修得があって初めて成り立つものである。

参考文献及び資料

- *1. 佐藤宣踐ほか：外国選手の体格について「柔道」（講道館）1979年2月号
- *2. 川村禎三・貝瀬輝夫：世界柔道選手権大会の試合内容の分析「柔道」（講道館）1977年10月号
- *3. 松阪猛：フランス国際柔道大会、監督報告「柔道」（講道館）1979年3月号、p. 27
- *4. 松下三郎：東ドイツ国際柔道大会、監督報告「柔道」（講道館）1979年6月号、p. 60
- *5. 工藤雷介：新年の柔道界に望む「柔道新聞」（日本柔道新聞社）780号、1979年1月1日
6. 藤岡正春：柔道ゲームの分析（嘉納治五郎杯国際柔道大会）山陰体育学会（松江）1979年3月